

東北福祉大生 農作業や祭り手伝い

若者と中山間地つながる



いちじく畑で、動画を撮りながら鈴木代表（左端）に栽培のことを聞く学生ら
＝6月7日、山元町

東北福祉大（仙台市）の学生が、県内の中山間地域で農作業や祭りの運営を手伝って住民と交流を深め、その様子を交流サイト（SNS）などで発信する活動に取り組んでいる。同世代の若者の関心を集めて、地域と継続的に関わる「関係人口を増やし、地域活動の担い手不足解消につなげるのが狙いだ」。

「共生地域づくりプロジェクト」と名付けた活動には、総合マネジメント学部で地域課題などを学ぶ約20人が参加する。3グループに分かれ、昨年度から白石市と山元、亘理の両町を訪問。リンゴの収穫を手伝ったり、古民家を使ったイベントを行ったりして、住民と交流してきた。

農業従事者や地域の祭りに携わる人が不足しているといった課題を、同世代へ発信する取り組みにも力を入れる。活動の様子は広報紙「プロジェクト

SNSで発信◆担い手不足解消へ

ト通信」にまとめ、インスタグラムに投稿。YouTubeではサツマイモ倉庫の見学、地域で開かれたマルシェの様子といった学生が撮影した動画を公開し、好評を得た。

6月には山元町の農業法人「おひさま村」が町内で運営する農園を訪問し、イチジク栽培のこつや加工方法の説明を受けた。今後収穫を手伝い、商品開発にも挑戦する予定といい、鈴木仁一代表（60）は「積極的に提案があつてありがたい」と好意的に受け止める。

3年高橋爽太さん（20）は「住民には単なる労働力ではなく、活性化のアイデアを求められていると感じる。人と関わる楽しさを若者目線で発信し、同世代にイベントなどに足を運んでもらいたい」と意気込む。

指導する森明人准教授は「学生が交代しながら継続して地域に関わる仕組みができれば、担い手の維持につながる。あまり接点のなかった仙台圏の学生と中山間地をつなげられるよう、活動の裾野を広げていきたい」と語る。